

は せ ぐ ち
長谷口遺跡

所 在 地 瀬戸市長谷口町
調 査 理 由 東海環状自動車道建設
調 査 期 間 平成12年8月～11月
調 査 面 積 1,200 m²
担 当 者 北村和宏・小澤一弘・魚住英史



調査地点（1/2.5万「猿投山」）

調査の経過 長谷口遺跡は瀬戸市長谷口町に所在する縄文時代から近世にかけての複合遺跡であり、東海環状自動車道建設のため国土交通省から愛知県教育委員会を通じ委託を受け、本年度は平成12年8月から11月にかけてA・Bの2調査区1,200 m²の調査を実施した。

立地と環境 瀬戸市の河川沿いには狭い沖積地が盆地状に広がっており、矢田川の上流赤津川には赤津盆地がある。長谷口遺跡は赤津盆地の東側、赤津川に流れ込む木下川右岸の段丘上に立地し、木下川を挟んで左岸には八王子遺跡が所在する。現況は竹林であったが、それ以前は水田と畑である。

調査の概要 木下川沿いの低地部分（標高195 m）をA区、北側山際の部分（標高200 m）をB区として、本年度はこの2調査区で実施した。

A区では木下川沿いから水車小屋に関わる施設の一部を、B区では縄文時代（早期後半から中期後半）の土坑や集石炉、平安時代の竪穴式住居2棟を検出した。

A 区 A区の木下川に面した低い部分からは、幅1 mから30 cm程の大小様々な花崗岩からなる礫群を検出したが、これらの礫群は木下川の河道の一部と考えられる。

木下川より一段高くなったB区側（北側）の平らな部分は標高197 mから198 mを測る。平らな部分は竹林になる以前は水田であったようで、水田の床土が確認できた。

遺構は水田によって大部分が削平されていたが、調査区東側部分では縄文時代の土坑等を検出した。

調査区南西側では水車小屋に関わる施設（S X 02）を検出した。施設の南側は河川敷内となり、河川保持のため完掘できなかったが南北2 m 50 cm、東西（幅）1 m 70 cmを測る長方形で、周りを50 cmから70 cm大の花崗岩で囲み、後期古墳の石室を思わせるような状況で、花崗岩の内側には腐食が著しい柱状の木が添うように巡っていた。長方形施設の柱状の木で区切った南側では礫が敷いてあり、礫の上や間から扁平な10 cm前後の石や腐食した鉄が出土した。長方形施設は水車の基礎部分とみられる。

また施設周辺からは方形の石と扁平な石が出土した。

方形を呈した石は珪砂を砕く底石で、一辺が17 cm前後で厚さ12 cm前後を測る。内側のみ凹んだものと両面が凹んだものの2種類出土している。この底石の周りを板で囲み桝を作り珪砂がこぼれないようにして杵で搗き、珪砂を砕く底石が凹むと裏返して使用したそうである。珪砂を搗き碎いて、ガラス粉とするには約一昼夜水車にかけたという。

扁平な10 cm前後の石はトロンミルの中に入れた「遮胡の玉石」と呼ばれる北朝鮮遮胡で産する玉石で、昭和5年頃から輸入され長年使用されていたようで、戦後は輸入が途絶え



A区 南東部全景



A区 南西部全景



A区 中央部全景



A区 S X 02 全景



A区 S X 02 (南より)



A区 S X 02 (北より)



A区 S X 02 (東より)



A区 S X 02 (北東より)

たようである。トロンミルの中に入れた玉石(シャコと称していた)が研磨され摩耗し、その結果扁平になったものである。

なお『陶家室伝記』(戸田修二氏所蔵本、『瀬戸ところどころ今昔物語』所収)によれば享和三年(1803)には赤津に水車があったようである。

『瀬戸其外、石粉挽搗水車人別』

享和三亥年願済

・・・・・・・・

一 水車 一ヶ所 売粉搗 赤津村 中島新造

一 同 同 豊蔵

・・・・・・・・

以上三十二ヶ所』

B 区 B区は北側に山があり、山際の狭い平らな部分が調査区で縄文時代早期後半から中期後半の土坑や集石炉、平安時代の竪穴住居1棟等を検出した。遺構とおぼしきピットや土坑を検出しているが、無遺物のものが目立ち、現況から木の根や筍の跡、耕作にともなったものの可能性が大きい。

縄文時代の遺構は、調査区の東側と西側部分より多く検出した。調査区南西部分では集石炉を1基、検出した。遺跡全体を覆う茶褐色土の遺物包含層からは早期～中期後半頃の土器片や石鏃が出土している。

集石炉(SX01)は径1m25cmのほぼ円形状を呈した掘り込みを持つ集石炉である。集石の礫は被熱した礫が多い。掘り込み底面上にやや大形の礫が敷かれた状態で検出した。礫の総数は477点、覆土からは焼土や炭化物と縄文土器の小破片が5点出土した。早期の土器片と前期の土器片とが出土しており、縄文時代前期の集石炉と考えられる。

土坑(SK20)は長径80cm短径50cmの楕円形状をし、土坑内より中期後半の土器の口縁片が出土した。

平安時代の遺構は、竈のある竪穴住居(SB02)で現存部は西壁320cm北壁525cm東壁290cmを測る。住居跡の南半分は削平され滅失している。竈を築いた土の中からK-14期頃の灰釉皿や土師器甕(濃尾型)の破片が出土した。

時期不明の竪穴住居(SB01)はSB02の西側で現存部は西壁230cm北壁410cm東壁230cmを測る。内面にケズリのある甕が出土している。

ま と め 木下川を挟んで対岸には八王子遺跡が所在するため、八王子遺跡同様に縄文時代早期を中心とする遺跡と考えられていたが、今回の調査により平安時代の集落も展開していたことが確認できた。また、現在ではほとんど見られなくなった水車小屋の施設の一部を検出した。水車部分とみられ調査区内では木下川からの流水引用状況が不明であるが、南側の河川敷地内に水車に引く水路があったものと考えられる。地元での聞き取り調査では、明治初期頃にはすでに調査区内には水車小屋はなかったそうである。(小澤一弘)



B区 北西部全景



B区 中央部全景



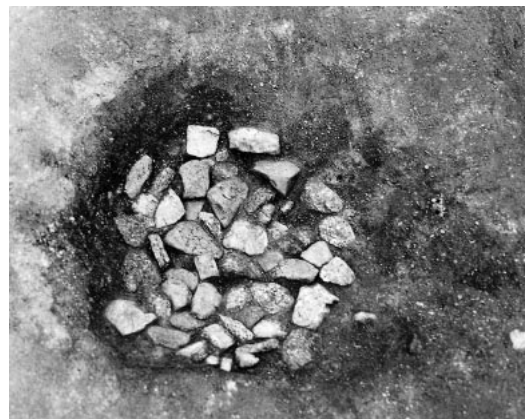
B区 北東部全景



B区 S X 01 上面



B区 集石炉・住居跡全景



B区 S X 01 下面



B区 S B 02 全景



B区 S X 01 下面